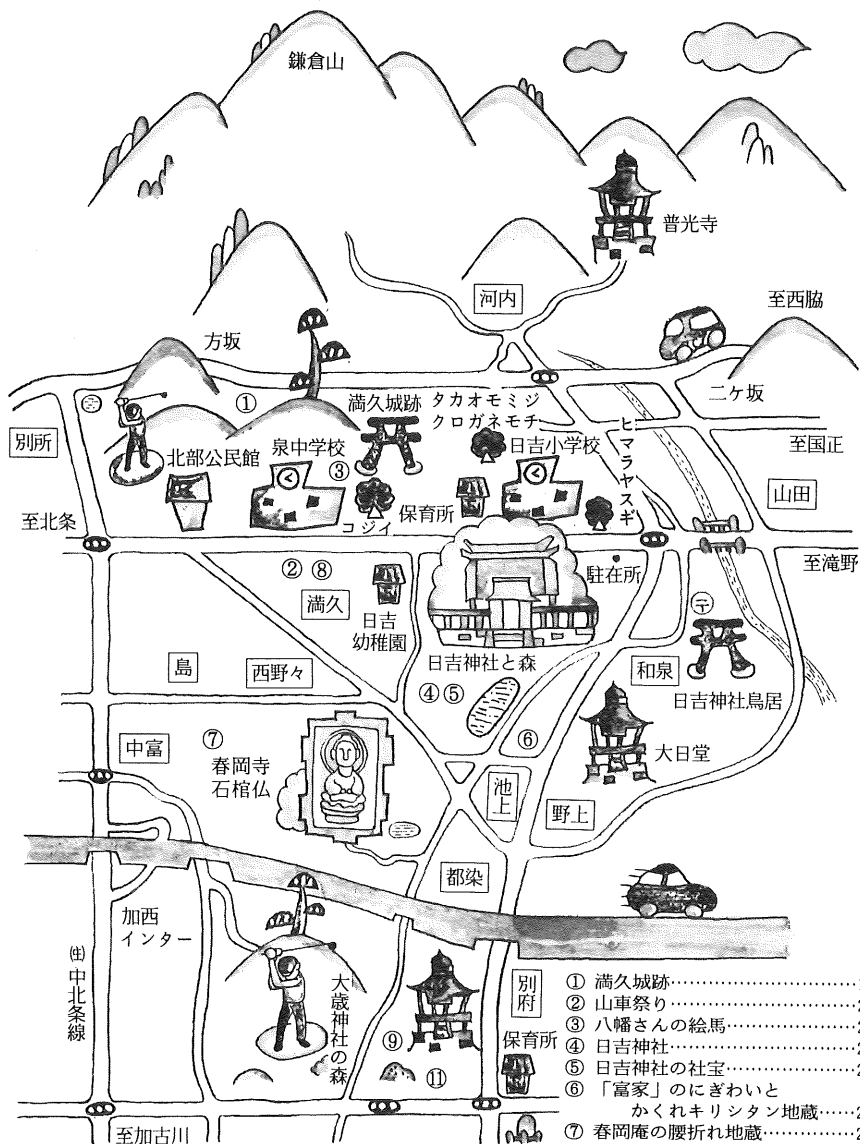


10 日吉の森と泉路の石仏

7.5キロメートル



別府	① 満久城跡	199
	② 山車祭り	200
	③ 八幡さんの絵馬	202
	④ 日吉神社	203
	⑤ 日吉神社の社宝	207
	⑥ 「富家」のにぎわいと かくれキリシタン地蔵	208
	⑦ 春岡庵の腰折れ地蔵	209
	⑧ 災難を神に救われた話	212
	⑨ 都染の弥勒庵	214
	⑩ 筆子塚	215
	⑪ 霊石	216

・日吉神社明神鳥居（県指定文化財）

凝灰岩製の高さ三、七九メートルもある堂々とした鳥居で、額束と右の柱に元和六年（一六二〇）の年紀があつて、手法的にも古いものを各所に残している貴重な鳥居です。

・日吉神社出土御正身体（県指定文化財）

嘉永年間（一八四八〜一八五三）におこなわれた日吉神社の社殿改築の時、神像、仏像、鏡、古銭百点が出土したものの。藤原時代から室町時代初期のもので壁などに懸けてご正体として崇拜したものを奉納したらしい。

・経塚古墳（市指定文化財）

古墳時代中期の複合墳。径二十八メートル、高さ五メートルの円墳で、長持型石棺二基を埋納した複合墳です。

・春岡寺石仏（市指定文化財）

古墳時代中期の家型石棺の蓋石を利用して鎌倉時代後期に阿弥陀座像を肉彫したものです。刻調には丸味があり、ゆったりとした豊かな感じをもって気品あふれる優作です。腰折地藏の名で親しまれています。

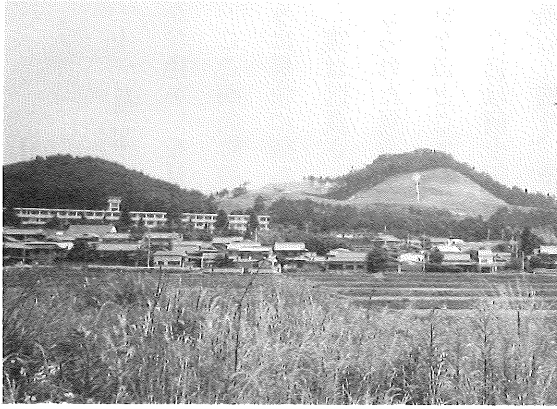
・大日寺石仏（市指定文化財）

家型石棺の蓋石に阿弥陀座像を薄肉彫している。舟形光背に七化仏を配しているが風化がはげしい。鎌倉後期の作。

・大日寺かくれキリシタン地藏

石仏の背面に十字架を彫ったものがあり、江戸幕府によるキリスト教禁止下にあつて、かくれた信仰を続けた人たちが、加西にもいたことがうかがえます。

満久城跡まぐじょうし (満久町)



泉中学校の裏山、一番高まった所に三段になった平坦地があります。ここが満久城の跡あとで、馬渡谷もうたにの領主内藤左京進盛次が馬渡谷からここに城を移したのがはじまりであるといわれています。時は室町時代の文明四年（一四七二）、諸国は戦国へのあわただしい気配にうごめいていた時期にあたります。満久城主は以後代々多可郡野間城主在田氏の配下になりました。

馬渡谷の領主内藤氏は、常州（茨城県）宇野の住人であった内藤内蔵介盛勝が康永元年（一三四二）に馬渡谷に来て居かまを構えたのが最初であると伝えられ、代々赤松一族の幕下にあつて、嘉吉の乱には内藤俊次が赤松満祐とともに木ノ山城で討死しています。

俊次の長男盛次は木ノ山城をぬけ出し、山里深く隠かくれ住んで、赤松政則が再興をはかった時政則に従って戦功をたてました。この時盛次は「馬渡谷」という地名が武門には不吉だと、満久に城を移して住んだのが満久城です。

山車祭りだんじり（満久町）

十一月二十三日、勤労感謝の日。晩秋の空はくっきりと晴れ渡り、山々の紅葉が、青空をバックにあざやかな色あいを見せていました。

ここ満久町の鎮守ちんじゆの森、八幡神社の境内は、子どもたちの歓声やおとなの笑い声、それに調子をつけるように軽快に打ち鳴らされる太鼓の音などで、時ならぬにぎわいを見せていました。

実は区長さんの取りはからいで、特別に山車祭りが催されているのです。満久町の山車は、古木の株でこしらえた見事な親子のトラが正面に飾られた、総ケヤキ造りの立派なものです。屋根の各所にはこまかく彫刻がほどこされていて、三メートル以上の高さがあり、実に堂々としています。

今日は何十年ぶりかで、暗い倉庫から明るい太陽の下に引き出されたのです。桧の葉や竹、笹でまわりを美しく飾り、モールや幕を張りめぐらせ、飾り提灯をつり、大きな御幣ごへいを屋根にさすと、ほんとうに生き生きとしてみなぎらします。

村の人たちのほとんどが、山車のまわりに集まって来ました。おとなたちは懐かしい昔の知人に思いがけず出合った時のように、驚きと喜びを顔中にみなぎらせ、子どもたちは子どもたちで、思いもかけない贈り物を前にした時のようなはしゃぎようです。

みんなは、かわるがわるこの飾り付けられた山車に、手をふれてみるのです。

山車の中には大きな太鼓が乗せられており、五・六人の子どもたちが、かけ声とともにいせいよく打ち鳴らします。

チリヒリヒャラリヤ　ラリリトロロ

ツイヤラリリトロロサアサイ

チンキトコチャン　チンキトコチャン　コオノデナー

アア　コオーオイデエト　ヨイヨイ

マアータヨナ　ヨサアーコイデアー

ヨオーホイセ　ソオーホコセ

マタヨナヨサキイ　バキッテソオレバ

カドカドニイタツ　ソオコリヤ

モウヒトツ　ヤッテクレ　ソーコリヤイー

独特の節まわしのはやしに乗って、みんなはかけ声とともに引き綱を引きます。

「昔は氏神祭の日はもちろん、国の慶事けいじがある時は、かかさず山車を出したもんや」

「山車を持つとったのは、満久だけやなかった。近くの村はみんなそれぞれ山車や屋台を持つとって、引きまわしたもんや」

「そりゃ、にぎやかやったわ」

思い出話と笑い声は、いつまでも八幡さんの森に続いておりました。

(原田一市氏・内藤夔詞氏の協力)

八幡さんの絵馬 (満久町)

昔、満久町に剣術の達人で内藤という人が住んでいました。

ある日、この内藤道場へ一人の大男が他流試合にやって来ました。とりつぎに出た下男の助三郎は

「主人は今ちようど留守にしております」とことわりましたが、がんとして聞き入れません。しかたなく下男の助三郎が相手になることにしました。

この下男は、近在でも名うてのしたたか者でしたので、牛の堆肥たいひをすくう熊手をかまえた姿は、どうして

どうして大へん強そうに見えたのです。

「こりゃ下男でも強そうじゃ、主人となると、わしの相手ではない」といって逃げ帰ってしまいました。

主人は喜んで、下男の勇姿を絵馬にして奉納ほうのうしました。

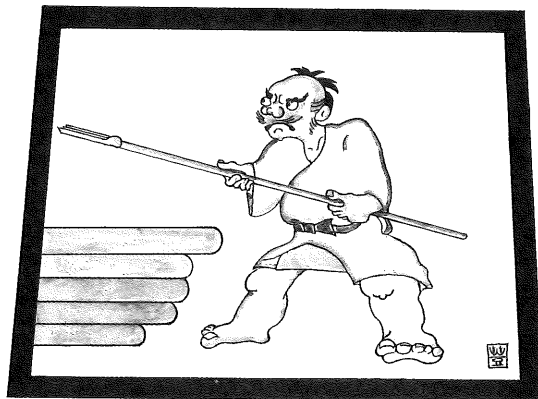
(広田京子氏収録の話より)

日吉神社(池上町)

お神輿みこしが七つもそろろう、にぎやかなお祭りで名高い日吉神社は、日吉小学校の前、池上町にあります。

大昔、人々がイネを作るようになりますと、土地の肥えた水の清いこの地方にも、たくさんの人たちが住みつくようになりました。

里人たちは、おたがいに力をあわせて生活していましたが、雷や大水・旱魃かんばつなどの自然の力には、大きな恐れをいだいておりました。そして大木や石、高い山などには、そのような自然の変化から人々を守ってく





れる神が住んでいると考えていました。

とりわけ、奥山（河内町鎌倉山）はこの地方では一番高く、その姿は堂々として人々を引きつける力を持っていましたし、何よりも、人々の飲み水はもちろん、農作物をうるおす大切な水の源みなもとの山でありましたから、みんなはこの奥山を神の山としてあがめておりました。

そこで、この奥山から流れ出る水によってくらしをたてている里人たちが相談して、奥山の神をおまつりするお社やしろをつくることにしました。村のほどに位置したこんもりと小高く、奥山がよく見わたせる今日吉神社の地が選ばれたのです。

淳和天皇の天長七年（八三〇）、近江の国（今の滋賀県）比叡山坂本の山王権現（日吉大社）の霊をここにうつして、にぎやかにお祭りしました。

それ以後千年以上も、お祭りは毎年九月九日（今は新暦十月十日）におこなわれています。

このお祭りには、奥山の水によって生活して来た村々から、七つの神

輿が出そろって、まことににぎやかなものです。

午前九時頃に、まず野上の神輿が河内の神輿を迎えに行き、「七度半の使者」をたてることから始まり、河内の神輿はこの使者のさそいを受けて、野上の神輿の待っている所にやって来ます。二つの神輿は、出合いの慶びを陵王の舞（ジョマイ）で表わします。また山田の神輿は十時頃に和泉の神輿をさそって、野上・河内の神輿の待つ所までやって来ます。そこで再び陵王の舞が奉納されるのです。四つの神輿は、大勢の人たちの見守る中を、そろって南下して日吉神社に近づきます。

一方宇仁の八王子神社の神輿は、九時半頃お宮を出て、途中馬渡谷の二ツ池で休けいをした後、時間をみはからいこの四神輿と合流します。五つの神輿の前で、また陵王の舞が舞われ、日吉神社の裏手を通って池上の御旅所に着きます。この時すでに中富・別府の神輿はここに到着して、全部で七つの神輿が並ぶことになるのです。

七つの神輿に、池上から選ばれた七人の少女によって、^{しいしば}椎柴につつんだお供えが捧げられます。このお供えの式に参加した少女は、絶対に難産に苦しむことがないといひ伝えられています。



お供えの式が終ると、お旅所の広場で「せいくらべ」の式をすることになっています。神輿をかつぐ者たちが、「ヨイサ・ヨイサ・ソレサッシモセ」のかけ声も勇しく、自分たちの神輿を高く高くさし上げて、その高さを競うものです。勢い余って神輿同志が衝突しょうとつすることもあり、自分こそ一番高いぞと上げる歓声で、誠ににぎやかで勇ましいものです。

陵王の舞の後、七つの神輿はそろって日吉神社に向かいます。ぬけるように澄みわたった青空の下、重く穂首こがねいろをたれた黄金色の稲穂いなほに映える神輿の黒と、飾られたケイトウの花の赤、神輿をかつぐ人たちの白い衣装と、なかなかカラフルで、見るものの心に強い印象を与えてくれます。

七つの神輿は、着飾ったお参りの人たちや、にぎやかに品物をいっぱい並べた出店に見守られて、元気よく、かけ声をそろえて境内を練り歩くのです。

(北田正夫氏の文及び加西郡誌参考)

日吉神社の社宝（池上町）



日吉神社では江戸時代の嘉永の頃（十九世紀中頃）社殿を大改築しました。この時、新しい社殿をつくるのにその位置を後へ広げることになりました。ところがこの拡張には、一つの困った問題がありました。それは、お宮のすぐ後に大きな松の木があって、この松の木は昔から、絶対に近づいたりさわったりしてはいけないと言ひ伝えられていたのです。でもこの松の木を切り倒さなければ拡張できないのです。氏子の代表たちが何度も相談した結果、「社殿を直すためなんだから神さんも許して下さるにちがいない」ということになりました。恐る恐る木を切り、根元を掘って見ると、そこから金色こんじきに輝く神像や仏像、銅鏡どうきやうが続々と出て来たのです。

日吉神社は、千百五十年もの歴史を持つ古いお宮です。昔から度々兵火に焼かれる危険にさらされて来たのです。このため社宝を土中に埋めて、目印の松を植え、盗掘ちやくくつをおそれて、近よってはならないといったえていたのです。人々は「出現社しげんさん」を建てて、この松の根とともに出土品を大切に守りました。

（林直氏の話より）

「富家」のにぎわいとかくれキリシタン地蔵（野上町）

日吉神社には、金運の神大黒様が祀まつられていて、「氏子からお金持が出る」という神託しんたくがあり、この神社を祀る村々を「富家の庄」と呼んだのだそうです。付近には今も「政所」とか「六の坪」と呼ばれる地名もあり、社殿裏から出土したたくさんの神像・仏像・銅鏡などは、この神社が強い勢力を持ち、広く諸国から信者が集まっていたことを裏づけています。

ところで、近年になって、この日吉の森にほど近い野上の大日堂から、かくれキリシタンのものと思われる背面に十字架をつけた地蔵さんが発見されました。かくれキリシタンというのは、特に島原の乱（寛永十五年一六三八）の後江戸幕府の強いキリスト教信者追放の目をのがれて隠れて信仰を続けた人たちを指すのですが、日吉神社の前みまへ妙見みょうけんさんのふもとには、たくさん洞窟どうくつがあったと言われていますし、ローマ法王庁の記録に「フケ」という名が見えるという事実を考えあわせると、かなりの数のキリスト教信者が、この地にいたことが想像できるのです。



昔から、日吉神社の参拝者が諸国からたくさん、ここへ集まって来ていたことと関係があるように思われるのです。

(林直氏及び仲田亮一氏の話より)

春岡庵の腰折れ地藏はるおかあん こしお (池上町)

今から百年以上も前のことになりましたでしょうか。この庵あんの先々代の庵主さんが、この庵を守っておられた頃のことだと聞いております。

庵の庭に裏山から風に乗って枯葉が舞いおりてくる、秋の深まる頃のことだったのでございます。

夜になって、にわかには風が強くなり、落葉を舞い上げたつむじ風が、庵の障子戸をカタコトと鳴らしては通り過ぎました。今夜も山栗の実をあさりに来たのか、ムジナが鼻を鳴らす音も聞こえて来ました。

物音にふと目をさました庵主さんの枕もとに、一体のお地藏さんが立っておられたのです。お地藏さんは、苦しそうな声で

「わたしは、この庵の裏山にうずまっている地藏なのだが、腰が痛くてならん。どうかわたしを掘り出して

ほしい。もしわたしを助けてくれたなら、その恩返しに里人の腰の痛みをわたしが治してしんぜよう」とおっしゃるのです。

驚いた庵主さんが起き上がろうとして見ると、地藏さんの姿はもうそこにはなく、モミジの小枝をならす風の音だけが、サワ・サワと聞こえるだけだったそうでございます。

「ああ、また夢を見てしまった」

と庵主さんは、気になりながらもそのままに、あくる日も暮れてしまいました。

ところが、その晩もまた夢枕ゆめまくらにお地藏さんが現われて、昨晚と同じように、

「どうかわたしを掘り出して下さい」と頼まれるのです。

二度までもこんな夢を見たからには、何かあるにちがいないと考えた庵主さんは、夜の明けるのを待ちかねるようにして、里人たちに裏山を掘ってもらったのだそうでございます。すると、たくさんの朽ち葉の中に深くうずもれていたお地藏さんが、掘り出されて来たのです。上にかぶさった重みのためでしょうか、こ



のお地蔵さんは、腰のところでポッキリ折れていたのでございます。

庵主さんたちは、さっそくお地蔵さんの折れた腰のところをつないで、庵のすぐそばのお庭におまつりしました。お地蔵さんのお顔には、心なしか安心したようなやわらかいほほえみが、見えたそうでございます。それからというもの、このお地蔵さんは、おおぜいの里の人たちの腰の痛みをなおして下さっているのです。

お参りした人が、このお地蔵さんに

「どうかわたしの腰の痛みを治して下さい」

とお祈りして、お地蔵さんの折れた腰のところをさすってあげるのです。そしてお地蔵さんにまいてある腰ひもをいただいで帰り、それを使わせてもらいます。

今でも遠くからも、お年寄りなどがたくさんお参りになっておりますし、腰の痛みがなおった人はお礼に新しい腰ひもをお地蔵さんにしてあげるならわしになっております。

(中塚道光氏の話より)

災難を神に救われた話（満久町）

それは、元禄の頃であったといえます。この満久の村に、大きな災わざわいが続いたのです。

長い間雨が降らないで、せっかく精根せいこんこめて作っている稲が、旱害かんがいに合い、米がほとんど取れなかったのです。年貢ねんぐはおろか喰くうにも困る状態でした。

その上、村人が家族同様に大切に育てていた牛が、どうしたことか次々に死んでいき、どんなに注意深く育てても、二歳になるまでに死んでしまうのです。農作業のすべてを牛にたよっていた頃ですから、その困り方も想像できません。

悪いことは重なるものです。困りはてている村人たちに追いうちをかけるように、悪い疫病えきが流行して来ました。たくさんの人たちが、苦しみながらなくなっていくのです。村中が悲嘆のどん底につき落されたりしました。

時も時、村の裏山の浅香山と新田山から大きなホラ（鉄砲水）が出て、村の中央部を一瞬にして土砂の中に埋めてしまったのです。住みなれた家や田畑が、多くの人命とともに、瓦礫の中に深く深く沈んでしまったのです。

困りはてた村人は、但馬の国高峰山の午頭こづ天王にお参りして、一心に願をかけました。すると、村人たち

の心からの願いがきき入れられたのでしょうか、不思議にも、村人をあんなにも苦しめた疫病天災は、うそのように消え失せたではありませんか。

喜んだ村人は、この神徳に深く感謝して、浅香山の中央に立派な本殿を建立して、うやうやしくお祭りしました。

ある夜、この神さんのおつげがあったのです。

「浅香山の麓の新田谷に池をつくれ、そうすればどんな旱魃かんぱつの時にもその水はかれることなく、豊かな実りを約束するだろう」

というものでした。村人は早速池を築きました。

その後、この池はおつげの通り、日照りが続いて村々の井戸の水が干上ってもなお青々と水をたたえ、村人の飲料水をまかないました。そればかりか、一夜に水田四反歩（四十アール）の稲を養う水が、こんこんと湧き出たといえます。

つい最近、中学校の南側で井戸掘をしたところ、八間（約十五メートル）の底から、ガレキとともにたくさん松の埋木が出て来ました。当時の鉄砲水のすさまじさがしのばれたことでした。また、本堂は氏神さんに移されていますが、今でも流行病の退散神としてあがめられています。また池の水は磯部神社のご神水に使われます。

（内藤竣詞氏の話より）

都染^{つそめ}の弥勒庵^{みろくあん}
(都染町)



都染の町を開拓したのは、多田栄吉という人だと言われています。
栄吉は苦勞のすえ原野をきり開き、水田をつくりました。

ところがある年、植えた稲がすっかり枯れてしまったのです。その原因が害虫だとは知ったものの、その害虫を駆除する方法がないのです。すっかり困っておりました。

ある人から、「弥勒菩薩をおまつりすれば、必ず害虫を追い払って下さる」と聞いた栄吉は、比叡山からお招きして都染の村にお祀しました。その年から稲は丈夫に育つようになり、里人もたいへん喜んでこの弥勒菩薩を信仰しました。それが弥勒庵なのです。

このため都染の村にだけは「虫送り」の行事はありませんでした。

(加西郡誌より)

筆子塚ふでこづか（別府中町）

「筆子塚ふでこづか」は、師の恩に感じた筆子（弟子）たちが、故人の遺徳をしのいで建てたものです。

別府中町の薬師堂には、二・六メートル余の偉容をほこる宝篋印塔があります。松末好平翁の碑です。碑文によると、翁は長年にわたって郷里の子弟の教育につとめ、その門に学ぶ者は四七〇人にあまるといわれました。天保十年（一八三九）五七歳で亡くなられました。この碑を建てるにあたって、浄財を寄せた者は、別府・都染・常吉・繁昌・高岡（滝野町）におよびました。

尚、寺子屋とよばれる近世の庶民教育は、こうした有徳の人たちの奉仕精神に支えられていたものです。加西市内における近世末期の寺子屋は五十二を数えていました。そして、寺子屋の師匠たちの職業は、僧侶・医者ついで庄屋・村役人などで、すくなくとも二〜三村ごとにあつたようです。

市内の筆子塚は、五〇基にあまるといわれますが、そのほとんどは幕末期のもです。最も古い筆子塚は文化三年（一八〇六）のもので、西笠原町の墓地にあります。

（ふるさとのまち加西誌 県立北条高等学校提供）



霊石れいせき
(別府西町)

別府西町を流れる普光寺川の西、石ヶ坪といわれるところに、「霊石」と呼ばれている大きな石があります。昔は、しめ縄を張って、この石をけがさぬように大事に祀っていました。

この石が、年によって一年の間に、米一粒ほどの距離を、普光寺川の方へ寄って行くことがあります。そうすると、その年には必ず、日本国内のどこかで何かの大変な出来ごとがあるといわれています。つまり、大変事を予知する霊石だといわれています。

(加西郡誌より)